

昭和六三年七月から平成元年六月までのできごと  
新チーム構成メンバー

二年生	一年生	平成元年四月以降の新入生
マネージャーなし	マネ 眞鳥(富江中)	マネ 溝越(淵中)
選手 主将 岡 (富江中)	選手 田端(清水中)	選手 松山(清水中)
選手 浜口(深堀中)	選手 岩永(諸富中)	選手 浜口(深堀中)
選手 永井(佐々中)	選手 山崎(時津中)	選手 松尾(長崎中)
選手 徳永(岩屋中)	選手 池田(横尾中)	選手 山口(横尾中)
選手 田川(桜馬場中)	選手 藤原(桜馬場中)	選手 川原(深堀中)
	選手 江頭(横尾中)	選手 白浜(真城中)
	選手 岡田(岩屋中)	選手 松下(戸町中)
	選手 城添(山里中)	
	選手 橋本(大瀬戸中)	

### 超大物

今年の中学三年生には超がつく大物がふたりいる。

ひとりには、松山ゆかり 一七五センチ フォワード 佐世保清水中学校。

もうひとりには、浜口典子 一七九センチ センター 長崎深堀中学校。

松山は前述(第二章)の田端の後輩で、浜口はこれも前述(第二章)の浜口の妹である。

過去のいきさつからして、大方の予想は、ふたりとも鶴鳴でやるようになるだろうと見ていた。

私も本人や親の口から「お願いします」というセリフを聞いて安心したかったが、なにしろ昨年の田端と岩永のリクルートで散々な目に会ってるから慎重に行動した。浜口の場合は問題はなかった。私も本人も中学校の関係者も、すべてがそう思っていたし、一〇月になって中学校に初めてパンフレットを持って募集に行っただけでも、それは形式みたいなものだった。

松山の場合はやっかいだった。田端の件があった翌年だし、大物をふたりとも抜かれるのははがゆいから何とか引き止めようと、地元の関係者も必死である。リクルート活動は一〇月を過ぎてから、しかもまず、高校の担当者が何より先に中学校に対して申し出ること。決して、学校より先んじて直接親や本人に交渉してはならない。というようなことが中学校の校長会から高校の校長会に申し入れしてある。ところが、県内ではそれが忠実に守られていたとしても、県外から入りこんで来るリクルーターはそんなのお構い無しだ。ひどいものになると、学校もコーチも本人も知らないうちに、親と話がついていて本人の行く先が決まってしまうというケースさえある。

また、県内であっても、正式に学校を通したって、なかなか本人や親に会わせてくれなかったり、学校に渡した資料が本人に渡っていなかったり、本人に会わせてくれた時は、すでに水面下で工作が進んでいて本人の進路は決まってしまう後だったり、いろいろである。松山のリクルートに関して槍玉にあげられたのが、母親の発言だった。

前述のごとく、取り決めはあっても、みんな必死だからあれこれやってくる。松山にも、県外といわず県内でも、早い時期から勧誘が行なわれていた。それに対して、松山の母親は言うセリフを決めていた。何にもわかりませんから、監督さんに任せてます」そう言いながら、腹の中では鶴鳴に行く決めていた。

清水中学校の監督は、学校の教諭ではなく社会体育の指導者だった。監督は、本人や親の意志がそのであると知っていたけれども、よろしく願いますと頼みこんでくるリクルーターたちに、「私は学校の教師ではないから、頼まれてもどうにもできませんよ」と言いつて逃げる。母親も監督も、うっかりいろんなことをしゃべると変に誤解されるから、そう言いつて逃げておくのが一番よいと思っていたのである。

ところが、だんだん日が過ぎていくうちに、松山はどうも鶴鳴に行く意志が強そうだという臭いが強くなってくる。そんなことは誰がしゃべったということに関係なく、雰囲気でわかってくるものだ。それで、母親の発言が攻撃の材料にされた。「監督さんに任せているって言いつたって、外部の人間なのに、学校を通さずに話を進めるとは何事だ」というわけである。

私が一〇月になってすぐ、パンフレットを持って学校に行つたらさっそく、そのことを言われた。

「もう話はいってるんでしょ」

相手はもうやけになっている。

「私は今初めて、こうして募集に伺つてるんですよ」

「……」

あとはもう、冷静な話し合いにはならない。

長年リクルート活動をやっているが、去年と違い今年といい、実にいやな思いをした。なかでも、表には出て来ないで裏で糸を操るブローカーまがいの動きをしている者がいるのには腹が立った。そういう輩がデマを流し、本人や親の判断を狂わせてしまうのである。

鶴鳴に來た選手達が必ず口にするこぼがある。

「先輩に気を使つてオロオロすることがないからのびのびやれる」

「中学の時よりも遠征や合宿にお金がかからないから助かる」

のふたつである。

お金がかからないのは、強化部だから部費とは別に強化費を持っていて、年間二回程度の県外遠征ができるからである。もちろん公式試合への参加はすべて学校の経費で行ける。

中学では部活動に対して校友会の予算を組めないから、振興会予算で組まなければならない。振興会の経費は受益者負担だから、こどもが部活動に入つたら、学校に納める教育費以外に親は振興会費を出さなければならない。中学ではだから、こどもが部活動をやれば親は金がかかるのである。そんなことを知っているから、私は部活動の保護者会や後援会を作らない。そんなものを作れば結局は親に金の負担をさせることになる。それがいやなのだ。

もっと、親と選手と先生とが親密になれる組織を作つて積極的に協力したいという保護者がいるが、私がいつも考えるのはその逆の立場にいるこどものことである。選手の中には、こどもが部活動をやるのを親があまり好まず、シューズを買つてもうつのですら親に気がねしている者もいる。そんな選手に、バスケットはやりたいけどお金がかかるから……などと心配させたくないのである。だから、部の予算と、強化費と、試合の度毎にいくらか入ってくる激励費や饞別や栄養費などをうまくやり繰りしてヘンクリをつくるのである。

私がいつも考えるのは、私が何十回説得に通つたところで、私がどんな指導者なのか鶴鳴といつとこ

るは住みやすいところなのかが本当にはわからないはずだから、入学した後で、「思っていた以上にいいところだ。やっぱり来てよかった」と、思ってもらえる指導者でありたいし、そんな環境をつくっておきたいということである。もちろん、「来なければよかった」と、思う選手はひとりも出したくない。選手にとって、鶴鳴のバスケットを選択するか他を選ぶかということは、一生の幸せか不幸かを決めると言っても過言ではないくらいに重要なことであるし、また、選んでしまったらやり直しのきかないことだから、どんなことがあっても後悔させるようなことがあってはならない。

私が嫌うのは、選手の飼育殺しである。ライバル校に行かれたら困るからというので、センターは充分に合っているのに、鶴鳴に来たら三年間補欠にしかねないとわかっていているセンターを勧誘するようないことはしない。だから、何人もの人から言われる。

「それは本当のコーチではないよ。コーチの仕事は勝たせることさ」

「そんなきれいなことばかりやってたってダメだよ」

私は勝たなくてもいいと言っているのではない。来た選手が後悔するようなリクルートをやっていけば、結局は選手がまったく取れなくなってしまうだろうと思うのである。そうになると、いくら勝ちたいと思っても強いチームはつくれないではないか。

こうして、取った後の選手に絶対後悔させないようにと精一杯気を使っているにもかかわらず、水面下で暗躍するブローカー達のデマに簡単に騙されて、横取りされたりする選手が後を絶たないのはとても悔しい。

## 大物

運が向いてくると、思いもよらなかつたことまで飛びこんでくる。前述のふたりに加えてさらにふたりの大物が加わった。超はつかないけれど、大物だ。

ひとり、山口理香 一六七センチ フォワード 長崎横尾中学校。

もうひとり、松尾朋子 一六〇センチ ガード 長崎長崎中学校。

今年の特待生の枠は三名である。が、交渉は前述のふたりと松尾・山口の両者に続けていた。松山・浜口は大丈夫だが、松尾・山口は五分五分だったから、どちらか一方がくれば枠はいっぱいである。

冬になった。

前述のふたりに続いて山口が意思表示をした。三人決定である。もともと私は、松山をガードで使うつもりだったので、松尾についてはあきらめぎみだった。ところが、年も押し詰まる頃、長崎中学校の先生から、松尾の親が会いたいと言っているという連絡があった。

私は取るものも取り敢えずとんで行った。父親の話を聞いてみると、自分は公立の進学校に進んで欲しかったが、本人がどうしても鶴鳴でバスケットをやりたいというので折れたというのである。

私は、今現在すでに特待生の枠はいっぱいになってしまったことを告げた。しかし、父親はそんなことはどうでもいい。ただ本人がどうしてもやりたいというのからよろしくお願いします、と言っただけである。

私は学校に帰ってその旨報告した。

まず教頭に言った。

「先方が条件はつけなくてもいいと言ってるからといって、はいそれでは有難く…では私は申し訳ないですよ。スポーツ特待の枠は無理ですから、学業特待の方で取ってくれませんか」

私の申し入れは一応運営部会にかけられたが、満場一致で採択された。これで、三人と思っていたのが四人になった。しかも、ポジションの無駄はひとりもない。それに、それぞれが、それぞれのポジ

シヨンにおいて、過去現在を通じて最高の選手ばかりである。とくに、思いもよらなかったガードの松尾の加入は、松山をフォワードにまわせることになるので、得点力の大幅アップが期待できる。ようやく神様が味方してくれるようになったと思った。

## チヨ

一方、現役のチームは二年生が岡・浜口のふたりしか戦力にならないが、一年生の即戦力が多い。そして、六月の高校総体が終わり、代が変わった時点でみな張り切っている。ライバルの純心にはまだシユーターが残っているが、強力なセンターとガードが卒業したのである。今度は勝てるぞと誰もが思う。

県の新人戦はいつも十一月中旬に行なわれるが、その前に各地区で新人戦が行なわれる。それが県新人戦のシードを決める試合にもなるが、三年生が退いた後の初めての大会なので、関係者が新チームの戦力分析に戦戦兢兢となる興味ある試合でもある。あるチームが大差で優勝すれば、「あーあ、今年もA校がダントツか」と、がっかりするし、接戦で優勝が決まれば、「今年は面白いぞ」と、監督の心境なんかそつちのけで外野席はそれぞれが評論家になってなかなかにぎやかである。

その新人戦は一点差で純心に勝って優勝した。しかし試合のレベルは低い。こちらもずっと低迷が続いていた後だけに、勝ち方がわからない選手ばかりだし、相手の純心もハイレベルの選手が卒業した後で、主役を演じてきた選手がいない。だから、幼稚なミスが双方頻繁に出るレベルの低い接戦だった。でも、久々の優勝だ。私が苦笑いしている一方で選手達はおおいにはずんでいた。

それから約三週間後、いよいよ県の新人戦である。これは逆に、七点差で純心に負けた。試合内容は三週間前の地区新人戦とは別人のように両チームともすっかりしたよいチームになっていた。高校生というのは、公式戦を一回でも経験するとこんなに違うのかと、あらためて感心させられた。

さて、試合の内容であるが、鶴鳴はポイントガードがいつも問題だった。二年生にはいないし、一年生の田端をポイントガードにするつもりだったが前述のようにケガ続きだったからプレイにどうしても切れない。そこで池田に頼らざるを得ない。

池田は横尾中学校出身で、ミニバスケットからずっとやっており、中学の時もポイントガードだったのだが小柄で非力だった。だから、中学までは巧さでなんとか乗り切れるだろうが、高校では力で潰されてしまうだろうと思っていた選手である。ニックネームをチヨといった。

しかし、本人が鶴鳴でバスケットをやることを望んでいたし、彼女の巧さが多少役には立つだろうと、思ってバックアップガードのつもりで私は取った。ところが、様々の事情で次年度の大物が来るまでの一年間、池田のポイントガードで凌がなければならなくなってしまった。

その池田で県新人戦は勝負が決まった。一点を追いかけて緊迫した試合が続いていた後半の残り二分、ハーフラインのところ池田が見事にドリブルをスティールされ、ランニングシュートで楽々二点を取られた。差が三点差に開いた。そして、そこで勝負が決まった。

池田をポイントガードとしてフルに使えば当然ダブルチームで潰されたり、ドリブルスティールに遭うことは当然起こり得ることとして予想はできていた。

「チヨを責めることはできないよ。これは当然予想がつくことだ、だから周りの者が安全にボールを受けて処理できる力をつけなければまたチヨに負担をかけさせることになるからね」

試合が終わった後で私はみんなにそう言った。

年が明けた一月、県新人戦のベストエイトだけが参加して、九州高校春季大会の県下二次予選大会がある。これは、優勝すると二位になるとでは雲泥の差がある。前年度純心がベスト四になっている

ので優勝して出場すれば来月の九州大会は長崎一位代表がシードになるのである。二位で出ればノーシードだから初戦から強豪に当てられる。

この二次予選は県新人戦とまったく同じような進行になり、勝負は後半の残り二分台に持ちこまれた。純心はやはり池田潰しである。疲れてくると体重が軽いだけにちよっとの接触でも池田はよろめく。タイムアウトも有効に使ったし、選手の交代も勝負どころを見越してうまくやった。あとは、池田のふんばりに頼るしかない。

ほんとに危ない場面があった。あわや県新人戦の二の舞かと思った瞬間、相手の当たりに腰を引かず、池田が攻めたので、相手の池田潰しはファウルになった。この瞬間、微妙に動いていた勝利の女神はフラツとこちらに傾いた。その後の二分間は、田端のパワーが少し回復したことも手伝って、池田のふんばりで逃げ切った。差は、お返しには一点足りない六点差だった。

この優勝は実に大きかった。なぜなら、九州大会のシードがかかっていたからである。この試合の成績が二月の九州大会のシードに関係する。二月の九州大会の成績が六月の九州大会のシードに関係する。六月の九州大会の成績がインターハイのシードと八月下旬に行なわれる九州国体のシードに関係する。というぐあいに次々と関係してくる。

事実、その後の試合は、二月の九州大会はシードに入れたおかげでベスト四に残った。六月の九州大会も、二月にベスト四だったからシードになり、再びベスト四をキープできた。九州大会でベスト四だったので八月の九州国体ではやはりシードされ、組み合わせの運も手伝って二位になり、北海道国体の出場権を得ることができた。

ほんとうは、中村学園がナンバーワン。ついで、小林、福岡第一、九州女学院というのが実力順位だった。ところが、ひとたびチャンスが巡ってくれば運までついてくるものだ。九州国体では、実力四番手の九州女学院は初戦から福岡のパートに入って潰されてしまっし、鶴鳴は福岡を捨てて宮崎一本にしばった作戦が当たり、勝ちを拾い、すべてがうまくいった。

これも、一月の県大会で優勝したからそれからの引続きでこうなったのだし、もつと的を絞れば池田が持ち堪えてくれたからに外ならなかった。私はその後、ことあるごとに選手に言った。「普通、恩というものは、選手が指導者に対して感じるものだ。しかし、私は逆にチヨに恩を感じる。チヨがふんばってくれたから北海道に行けた。チヨがふんばってくれたから、今、ナウ（松山）やマック（浜口）が活躍できる舞台ができあがっているんだ」

新人の大物四人が入ってくれば、松山と松尾のガードコンビは、目のよさといひプレイの切れといい、いきなり鶴鳴を背負って立つほどのものを持っていた。だから、この新人が入ってくるまでなんとか九州ベスト四ぐらいを維持しておけば全国を狙う足がかりができる。

しかしそれも、ガードが持ちこたえられるかどうか最大の不安材料であった。シューターには二年の岡と一年の岩永、フォワードにはケガばかりしているけれど一年の田端がいる。インサイドのパワープレイでは一年の山崎、長身のセンターでは一応二年の浜口がいる。しかし、それとてそこまでボールが運ばれてこなければどうにもならない。

その、ボール運びの重責が華奢な池田の全身にかかったのである。池田は映画館に入る時も電車に乗る時も小学生で立派に通用した。童顔の彼女は野球帽をかぶせてジーンをはかせると、まず間違いなく男の子だと思われ、リトルリーグの選手か何かだと誰もが思った。

池田自身も知っていた。

「私は、松尾や松山が入ってくればもう試合に出してもらえないことはないな」

かわいそうだけどそれは事実だった。それを知っていて池田は、自分のからだの骨がきしむほどがんば

ってチームの屋台骨を支え、新年度を迎えたらあの大物新人達にすがすがしい顔でバトンタッチしてくれたのである。

夏、一生懸命生きて子孫を残し、一週間で地上の生活を終える蝉。池田はまさにその蝉だった。ただほんものの蝉は生きて自分の子孫を見ることはできないが、池田蝉は自分が創った舞台の上で後に続く後輩たちがどんな活躍をしてくれるのか、生きて見ることができると。

私は池田が三年生になる時、新入生の特待生枠をひとり分余して募集し、そのひとり分を池田にまわした。池田は自分から志願して鶴鳴を選び、新人が入ってきてからはベンチウォーマーで卒業までを過したが、彼女が果した功績は他の誰よりも大きかった。

「何かで報いたい」

三年生になって一年間だけしか特待生扱いができないが、それが私にできる精一杯の恩返しだった。

## バル

マネージャーといえば、一般的には雑用係というイメージがあるが、私の場合は違う。私の重要なスタッフである。会社組織で言えば、私とマネージャーは経営者であり、選手は社員である。

マネージャーの仕事をやつとあげてみる。

- ・試合や練習のデータ整理
- ・選手のコンディション（ケガ・病気・体重変化等）の把握
- ・備品、消耗品の管理
- ・経理一切
- ・日常の練習の指揮
- ・渉外

まだまだあるが、これに遠征や合宿が加わると目がまわるように忙しくなる。だから、マネージャーは一学年にひとり、都合三人は絶対に必要なのである。しかも、これだけの仕事を、いちいち私の指示を受けてやるのではない。自ら判断して処理する。私は報告を聞くだけである。これだけの仕事をさばくためには有能な人物でなければならない。選手として将来性がないからマネージャーになるというのでは役に立たないのである。

マネージャーはスタッフだから服装も違う。パンツもブルゾンも選手より上等の物を着せる。選手と同じ練習用ジャージをはいて忙しく走り回っていると、心身ともに雑用係になりきってしまうからいやなのである。「あんたたちが強くなるための公式は、私のアタマの中に組み込まれているの！」そんな自負心というかプライドというか、そんなものがマネージャーには欲しいのである。

私は最高指揮官だから、作戦や戦術に関しての研究を怠ることができない。それも、チーム運営の雑多なことで私が追われていては研究などできはしない。研究は、机にかじりついて文献を読みあされば深まっつてはいくが、アイデアが湧き出るには、心も頭もカラッポにできるゆとりがなければならない。私は、全国に無数にいるコーチ達の中で、心も頭もカラッポにできる数少ないコーチのうちのひとりではないかと思う。それは、雑多なことで私に気を使わせないで、チームの切り盛りをしてくれる歴代の優秀なマネージャーに恵まれているからなのである。

その歴代マネージャー達の中でなんとと言っても真っ先に思い出すのは福田由美子である。昭和五七年に卒業した。鶴鳴のマネージャーを「マネージャーとはこういうものなんだよ」と確立してくれたのが福田である。それからは代々受け継いでいく中で次第に自分達で改良を加え、よりよい仕事ができるよ

うになっていった。そして、確固たる地位を築き上げたのが昭和六三年卒の内田美后であった。この内田になってから私は内田の仕事の領分に介入しなくなった。なぜなら、彼女の方が私より先が見えたからである。

さて、スポーツの世界で選手のことを話題にする時、よく『一〇年に一度の逸材』とか『百年に一度しか出ない天才』という表現を使う。そんな表現の対象になった選手は、熊谷が最初であり、次いで原田、そして先に述べた『超大物』のふたりもまちがいなくその中に入る。しかし、マネージャーでその仲間入りをしたのは眞鳥紹子が初めてだった。

眞鳥紹子。通称パール。五島富江中出身。

私が彼女に、「この子には参った」と思ったのは、彼女と一緒にパソコンで試合のデータ処理をしていた時であった。彼女は私の仕事をじっと見ていて、

「あら先生、そこ、いちいち数値を入力してるんですか？　こうして計算式を入れておけば、自動計算しますよ」

と言った。私は啞然として彼女の顔を眺めた。彼女の照れくさそうな、それでいてどことなく、

「一本取ったぞ」

と言いたげな笑顔がとても印象に残った。

キーボードの基本操作から手ほどきして一年、彼女はそこまでマスターしていたのである。彼女の仕事ぶりはすべてがそうであった。いくら優秀なマネージャーといっても指示された仕事を正確に、忠実に実行するというのが普通である。彼女の場合は一指示すると二の仕事になっていた。かならず工夫していた。そんなことがあってから、私はマネージャーの仕事に口をはさまなくなった。これは内田の時と同じだった。

例えば、A・B・Cと三つの仕事があって、私はAの仕事が気がかりだったとする。ところが、眞鳥はAのことについては何の報告もしない。昔はそんな時、「Aの仕事はどうなってるんだ！　この役立たずが！」などとなり散らしていた。しかし、彼女には確めることも少なかったし、たまたま確かめた時にまだ処理していなかったとしても、どなり散らすことは決してしなかった。私が、A・B・Cの順で処理した方がよいと思っても、彼女には彼女流の仕事の順番があって、B・A・Cの順がよいと判断しているのである。そして、それは、私が思っているより彼女の段取りの方が能率的である場合の方が多かった。

彼女が鶴鳴を受験したのは、中学時代から続けているバスケットをさらに続けてやりたかったのと、将来体育コースの大学に進みたいという意志からだ。事実、彼女の筋肉、運動のセンスは運動をするためにこの世に生まれて来たと言っても過言ではないくらい優れていた。だから、バスケット以外の例えばダンスだとか器械体操だとか水泳だとかをひっくるめて判定すれば、文句無く彼女がチームで一番だった。

しかし、バスケットをやるには身長が必要だ。それに技術的にも戦術的にも高度なスポーツだから、ある程度高いレベルでの試合を数多く経験しなければなかなかマスターできない部分がある。

彼女の泣きどころは、バスケットに於いてもっとも大切なこの二点に欠けていることだった。身長一五四センチ、離島の小さな学校でいくら熱心に練習していたとしても、ハイレベルの体験は少ない。高校三年間でそれをカバーするのは難しかった。しかも、今年は特に、県内と言わずお隣の佐賀県まで出向いてリクルートをやり、集った選手達は県大会のトップレベルであるばかりでなく、九州大会まで出場した選手がたくさんいた。

彼女が一年生の時の夏休みに入って間もなく、体調が悪くてしばらく休んだ。しかし、そろそろ治っ

たかなと思う頃になってもなかなか練習に出てこない。そうこうしていると、五島の母親から私に電話があった。「ちょっと本人と話がしたいから、五島に帰してくれませんか」という。

母親の口ぶりではどうも本人がバスケットをやめたいと言っているらしい。私は、たとえマネージャーをやることになっても五島の高校に戻すよりも鶴鳴で続けさせるべきだという点で母親と意見が一致し、五島には帰さず本人と話をした。そして彼女は、夏休みからプレーヤーを断念し、マネージャーをやることになった。

ところが私には、一方的に思い込んでいた錯覚があった。同学年でリクルートされてきたメンバーと、次に入ってくる超大物たちのことを考えると、いくらがんばっても主力選手になれる望みがないとわかり、彼女は悩んでいたのだと思い込んでいたのである。しかし、彼女をそこまで追い込んだ悩みというのは、寮生活での人間関係の問題だった。

それなのに、彼女はひとこともその問題には触れず、彼女に対して思い込んでいた私の思いをただハイハイと聞いてくれた。私の一方的な思い込みというのは、他の選手がよすぎるためにレギュラーポジションは難しいということと、彼女の油断のない目配りに私がマネージャーとしての白羽の矢を立てていたことだった。

彼女が三年生になってからだった。

「先生、あの時はですね、プレーに行き詰っていたからじゃなかったんですよ。そりゃ、周りの選手を見れば自分がエントリーに食い込むのは大変だなあとというのは自分でもわかっていました。でも、練習はきらいじゃなかったんです。だけど、先生の話を聞いてたら、必要がられてやる方がチームのためにもなるし自分の幸せにもつながるかなあとと思って、ハイと返事したんです」  
そう打ち明けられた。

自分では、ブレイに行き詰って悩んでいる選手を救ってやったつもりになっていたのに、救ってもらったのが自分だったとは……。指導者というのは、自分は何でも見えている。自分はすぐにわかる。そう思い込み、ずいぶん勝手なエゴを選手に押しつけているものだとつくづく思った。

しかし、私が日常見ていた彼女の油断のならない目配りは本物だった。長年コーチをやっていると時々そんな選手にめぐり逢う。彼女が二年になった時は完全に私の仕事仲間であった。私の下で忠実に命令されたことを実行するイエスマンのマネージャーではなかった。

しかし、仕事の先が見え、ときばきやれるということはいいことばかりではない。先が見えて仕事ができる分だけ上司には重宝がられるけれども、同僚には煙たがられるということがある。福田・内田・眞鳥の三人も同じことを味わったようだった。

### 強化試合

話はさかのぼるが、新チームになってすぐの夏休みに遠征合宿に出かけた。押し掛けたところは九州女子短大だった。3日間で4試合やってもらった。

一日目 一〇七対五四

二日目 八〇対六四 と 一一二対六三

三日目 一〇六対六四

いずれも大差で負け、相手の練習台にもならない有様だった。しかし、気の毒だとは思わなかった。「これから強くなるんだからきつと恩返しができる」  
そう思った。



今までは、積極的な遠征試合はほとんどしなかった。というより、遠征試合で力をつける前に練習で教え込まなければならぬことがたくさんあって、とても遠征どころではなかったというのが実情だった。また、遠征してお世話になるのならば、相手の指導者にも何か楽しみを与えなければならぬ。それもなかった。相手の監督の楽しみとは、たとえば、自慢できる選手がいるとか、練習の内容がなかなかいいというようなことである。

相手の監督だって、「あんな選手がうちにきてくれればいいなあ」とか、「なかなかいいことやってるなあ、うちも参考にしよう」とか、そんな楽しみがなければ世話をしやるにもやりがいがないだろう。私の場合、周囲の人々からほとんど誤解されていて、「鶴鳴はしょっちゅう共石にお世話になっていろいろ教わってるから強くなるさ」と思われている。とんでもないことだ。やってるバスケットはもたもたしてるし、大して自慢になる選手もいないし、そんなチームを共石に連れて行っただけで軽費の無駄遣いだ。

「そんなの関係ないよ。遠慮せずに来いよ」と中村監督は言ってくれるけれども、遠慮じゃなくてこっちの気が進まないのがある。私だって一応中学でも高校でも全国のトップレベルのチームを作った経験がある指導者だ。たぶん、自分でも見栄を張っているのだと思う。すなおでないところが確かにある。「もう少しましなチームにしなければよそには連れていけない」そんな気持ちが心の奥底にあるのだ。しかし、それももう気にしなくていいチームが創れそうだ。

九州女子短大での合宿は寮の空き部屋を借り、夜具は貸しフトンで風呂は銭湯。食事は近くの食堂と契約して朝食と夕食を作ってもらった。昼は弁当屋から買った。

昭和五年の春、お寺の本堂を借りて焚き出しまで自分達でやらせた合宿をしたが、昔はそんな合宿ばかりだった。その時は、私が長い間入院していた後だったので、再起を初心に戻ってやるうという意図があったからわざわざそんな、今どきはやらない合宿を計画したのだが、この北九州合宿も「さあ、これからほんとに強くなるぞ」という気持ちになるには、練習以外のことにいろいろ手がかったから返って効果があった。

その後、九月、一〇月、十一月の連休、そして冬休みと、こちらから出かけたりにこちらに呼んだりで近郊の高校とずいぶん練習試合をした。そしていよいよ春休み、実に五年ぶりに共石ひまわり杯に参加した。この遠征には、まだ例の大物新人達は入学式前だったが、松山・浜口・松尾・山口の四人を連れて行っただけ。久々の参加ということと新人達が大物なだけに、共石での話題は鶴鳴に集中した。

「いよいよ全国狙いだな」

「これで負けりゃ、山崎は監督やめるだろ」

と、勝手に人をビールつまみにしてひやかしたりおだてたりする。そうやって、あおられたりおどかされたりすると、

「こいつら、順調に伸びてくれるかなあ」と心配になったりする。

が、そんな心配は今までの心配に比べればまるで天と地の違いだ。今までの心配は存続の危機まで真剣に考えなければならぬような悩みだったのに対して、これからの心配は全国のトップレベルになるか否かの心配である。まことに贅沢な悩みだ。こうして、久々に会う懐かしい監督さん達とともに語らいながら、

「なんといわれようが、スポーツは勝たなきゃ、桜舞台に立たなきゃ」  
そう思った。

強くなるにはどうしても武者修業に出かけなければならない。するとお金がかかる。その、お金の問題を如何に解決するかが監督としての裁量の重要な部分だと私は思っている。監督としての条件をあげれば、『愛情がある』『根気つよい』『研究を怠らない』等々いろいろあるが、その中の第一番に『お金をつくれる』というのを是非入れなければならぬ。即ち、監督は経営者でなければならない。熱意があれば勝てるという時代はもう過去のものになってしまっているのである。

さて私の場合、これから強くなることは目に見えていたのでマイクロバスを買うことに決めた。遠征の度にJRを利用してはいるようではお金なんかいくらあっても足りない。部活動でもっともお金がかかるのが選手の足代なのである。宿泊はホテルや旅館に泊らなくても、先方の合宿所や選手の家に分宿させてもらうなど、安くで上げる方法はある。とにかく足代さえなんとかなれば遠征はできるのである。そんなわけで、私は知り合いのタクシー会社社長のYさんに中古のマイクロバス捜しを頼んだ。

さて、そのYさんのことについて少し説明をしなければならぬ。

Yさんは昔、娘さんが鶴鳴のソフトボール部の名選手で活躍していた頃、鶴鳴のPTA会長を務めたことのある人で、まだ私が駆け出しのコーチの頃よく食事につれていってもらった。がんばる若者が大好きな社長さんだった。そのYさんの口癖は、「スポーツは勝たなきゃ」だった。自分自身はゴルフの腕が相当なものだったらしい。

Yさんがまだ鶴鳴学園の理事をしておられた頃、自分の娘さんが所属していたソフトボール部ではなく、バスケットボール部の活動にとても協力的で、バスケットボール部後援会をつくる働きかけをしてくださった。そして実際に発足した。Yさんの意図は、バスケット部が活動しやすいように金銭的な援助をしてやるための組織づくりだった。

Yさん自らが先頭に立って、規約づくりから人集めまで積極的に動いてくださった。しかし私は、前にも述べたように、保護者や卒業生を強制的に会員にしたり定期的に会費を集めるのが好きではなかったから、せつかく作ってもらった組織であったが、それから数年後消滅させてしまった。

そのYさんから、四月の終わり頃電話がかかった。

「バスが見つかったぞ。すぐ来れるかね」

「は？… あ、そうですか。すぐ、ハイ」

私はとんで行った。タクシー会社の社長室のドアをノックして入るとすぐ、

「お、来たか。よし、すぐ行くぞ」

そう言っ、事務担当の部長さんに声をかけ、

「鹿谷君、君もいっしょに来てくれんか」

と言ってそそくさと外へでる。

「へ…」

そう呼ばれたその部長さんも、あわてて机の上を片付け下へ降りていった。一階が配車センターになっていて、そこで自社の運転手さんを呼びつけ、

「滑石の中古車センターにやってくれんか」

バタバタバターッと自分のペースで事を運ぶ。

その中古車センターに行ってみると、連絡がついていたものと見えて係の人が案内してくれた。そのバスは、二人乗りのマイクロバスで、年数は一〇年経っていて、走行距離は六万四千キロだった。冠婚葬祭の会社を送迎用に使っていたのを売りに出したのだと言つた。それからがYさんのすごいところだった。

「ところで、おたくはこのバスをいくらで買い取ったの？」

「一〇万です」

「フーン、おい、山崎君一〇万だつてよ、買えるかね？」

相手のことなどまるで無視している。相手は中古車販売の業者だから、それを整備して売りに出し、何十万円かの儲けを出そうとしているわけである。それなのに、

「それをいくらで売ってくれるかね」

ではなく、

「一〇万だつてよ」

と、自分で転売の値段まで決めてしまつて私に問う。まあ、その中古車販売業の経営者もYさんの友達だつたからこんな調子で話を進められたわけだが、やはり相手も商売だから儲けがないというのは不満である。それで、少しぶつぶつ言つてたら、

「高校の先生が自分で金を出してバスを買おうというのに何百万円も出せるもんか、たまにはこんな慈善事業もやらなきゃ」

それで話はおしまいである。結局中古車販売業者は一円の儲けもなく、そのバスは右から左に私の手に渡ってしまった。

そして、それからがまたYさんの本領発揮だ。今度はそこからすぐに電話して自分の系列会社の自動車整備会社の社長をその場に呼びつけた。

「赤川君、これを整備して乗れるようにして車検を受けさせてくれんかね。高校の先生だから金はないぞ。タイヤも中古の少し質のいいのを見つけて、いろいろ便宜図つてやってな。鹿谷君、君は手続き関係の世話を一切やってくれんか。陸運局と署の所長にはほくが電話しておくから。ふたりとも、山崎君はどうせ五月の連休にどっかへ行きたいんだろつから、それに間に合つように、頼むぞ」

こうして、私があつけにとられているうちに事が運ばれたが、終わり頃になってようやく私は事態が飲み込めてきた。企業や団体でなく、個人がマイクロバスを取得するというのは、法的にもいろいろ規制があつて無理なことなのである。通常の手続きを踏んでいたらまず認可がおりない。たとえお金は都合があつてもそんな手続き上のことでうまく行かないのだぞつた。

だからYさんが一切の根回しをし、そしてその手続きには自社の事務担当の部長に依頼したわけである。そんな面倒な手続きはプロでなければとてもできないのだ。部長さんはそれから約一週間、自分の仕事はそつちのけで私のバスの手続き関係に奔走した。整備会社の社長はこれまたあちこちに手配して、整備に必要な部品が中古で間に合つものはそれで済ませてとにかく安あがりで仕上げてくれた。最終的に、車両価格一〇万円。車検および整備関係五〇万円。保険関係五万円。しめて六五万円でマイクロバスが私のものになった。これが、何のつてもなく普通の業者を通して購入するのなら、たとえ中古でも百万円以上はするのだろつた。

学校では、強化部に対して特別の強化費がある。バスケット部は年間五〇万円である。その金は、一回の遠征に使うが、細切れに合宿に使うが自由だ。そのお金は使う一方で一向に貯まっていかないが、公式の試合の経費のやり繰りが実は資金源になるのである。旅費だ。

旅費は、飛行機で行こうが船で行こうがバスで行こうが、学校からはJR料金が支給される。私の場

合、そのJR料金をもらってレンタルマイクロバスで行くケースがほとんどだった。レンタカー代がかかるけれどもそれでもJR料金との差額が浮いた。その資金で補欠を連れて行ったりウエアを買ってやったりしていたのである。

で、これからのことを思うと、一回につき平均十五万円のレンタカー代がもつたいたなく感じられ、「一回遠征すれば一五〇万円か、それならマイクロバスを買った方が得かな」と思ってYさんをお願いした次第である。それが、六五万円で購入したわけだ。そんな借金は返すのに痛くも痒くもない。九州大会や全国大会に三回も出場すればすぐ返せた。あとは、毎年の車検に約三〇万円の費用を残しておけば、残りを何に使ってもいい。こうして、鶴鳴は強くなる毎にお金持ちになっていった。

悲しい後日談がある。

平成三年の浜松インターハイで鶴鳴は優勝した。十九年ぶりということと地元関係者は大変な騒ぎで、二週間後に盛大な優勝記念パーティーを催してくれた。しかし、Yさんはそのパーティーに姿を見せていなかった。代りに娘さんが出席していた。私は気になりながらもあいさつに忙しくてとうとうその娘さんとも話ができず閉会になってしまった。

その後すぐ中国遠征に出かけて、帰国後あいさつに出かけるよりも先に私はYさんの訃報を聞かされたことになった。取るものもとりあえず私はお通夜に行った。こつた返す弔問客の中から私の顔を見つけた息子さんが近寄って来て言った。

「先生どうも、おめでとつ」

「いえ、とんでもない。こんな席で……」

「いいんですよ。親父は病院でテレビを見てましてね、もう大喜びでしたから。いいんです」

「……」

「テレビを見ながら、『山崎はきつと金の無心にくるぞ、あいつめ』と言いながらとても嬉しそうでした」

私は息子さんからそのことばを聞いて絶句してしまった。

「あいつめ、金の無心に来るぞ」と迷惑顔をしながら、心の中では私が報告に来るのを今か今かと待っていたのだろう。そして、私が報告に行ったらどんなことばをかけてくれたのかまで手に取るようになる。

「おう、やっと一人前になったか」

きつとそう言ったはずである。照れ屋だから決して、

「よかったよかった。よくやった」などと素直には褒めてくれなかったはずだ。

腸ガンを六月から入院していたということだった。

## 五年ぶり

昭和五九年に、秋田インターハイに行ったつきり四年間、鶴鳴はインターハイに出場していない。しかし、それももう今年でピリオドだ。

年度が変わって四月、いよいよわさの新人達が公式戦に登場する。最初の公式戦は、中旬に行われた県下高校春季選手権大会だった。この大会は、地区新人戦と同様関係者にとって興味のある試合だった。地区新人戦は、三年生が引退した後の新チームの戦力分析という意味で興味があるが、春季戦はそれに新生が加わった戦力がどうかという点で興味があるのだ。

各チームとも点差が開いて勝ちが見えると新人を起用する。少しでも場慣れさせようとするのである。すると、関係者の目がそこに集まる。将来性が気になるのだ。鶴鳴の新人達は将来性どころか、スターティングメンバー五人のうち、松山・浜口・松尾の三人は新人ながら不動のスタメンだった。残るふたりが相手や試合内容によって変わるという状況だった。

試合は層が厚くなって誰を出そうかと迷うほどの鶴鳴と、新戦力の補強がままならず、新人戦と同じ布陣で戦わざるを得ない純心との差が如実に現われ、二〇点もの大差で鶴鳴が優勝した。そんな開幕戦の後だっただけに、六月の高校総体は、鶴鳴に対して他校がどんな戦いをするかが興味の焦点であって、勝敗の行方に興味を持っている者はほとんどいなかった。

ところが、決勝戦の純心との戦いは少し雰囲気違っていった。一人ひとりの選手の顔に緊張感が漂っているのである。試合が始まってみると動きが重く、途中もモタモタしてなかなか点差が開かない。あがっているのである。終わってみるとスコアは六七対六〇。これは一月の試合と少しも変わらないスコアである。

高校総体に出場したことのある選手やその采配をふるったことのある指導者はわかるはずだが、高校総体のあの雰囲気は他の大会と違って異様な雰囲気がある。大会が近まってくると、校長先生が各練習場に激励にまわる。応援団もまた、激励応援にまわる。一般生徒も放課後自分の友達の部活動の見学に行く。こうして、試合に出る選手だけでなく、関係者すべてが夢中になり、大会前の雰囲気はいやが上にも盛り上がる。当日は当日で、各学校とも総動員して超満員の観客席で応援合戦を繰り広げる。

実際、試合内容はレベルが低いのに、その盛り上がった雰囲気振り回され、やってる選手も何か大変な役割を背負わされているような気分になって試合をしている光景をよく見かける。そんな異様な雰囲気の中で平常心で戦いに臨めるというのは、かなりの場数を踏まなければなかなかできないものだ。

春季戦ではみんなの目を見張らせた鶴鳴の新人達も、並みの新人達と同様、高校総体の異様な雰囲気に見事に翻弄されてしまった。私が、素質はあってもまだまだ人間として未熟だという点で一年生達を信用していなかったことと、まかりまちがってインターハイ出場のキップを取り落とすことがあってはいけないと思い、慎重になりすぎたこと、この二点が以心伝心で選手達に伝わったのだろう。それが一層、選手のがりに拍車をかけたのかもしれない。

ともあれ、こうして連敗にピリオドを打ち、五年ぶりにインターハイ出場を決めた。そして、普通の新人達と同じようにあがり、とちり、通常力を発揮できなかった新人達には、これからその素質に見合うだけの人間的な修業をいやというほど積んでいかなければならぬだろうという課題が明確に残った。